



# 学校図書館 司書だより

## No.17 2013年12月



**図書館クイズ**  
今年、誕生50周年を迎えた、今も人気の絵本はなんでしょう？ ①いないいないばあ ②はらぺこあおむし ③ぐりとぐら

### 林しと読書

地域・家庭・学校で  
創り上げた図書館教育  
大野喜代美

以前勤務していた学校のことです。

語彙不足・経験不足が重なり、なかなか思うように話す・聞くことができない子ども達が、生き生きと自分の思いを語り、仲間と共に高まっていける授業ができたらと願っていました。

そこで、考えたのが、図書館教育と国語科の授業研究を結びつけることです。

子どもたちが思わず図書館へ足を運びたくなるような魅力的な図書館にするために、地域の方たちにも協力していただきました。図書館全ての書架を手作り書架にしていたいたり、PTA奉仕作業で壁の塗り直しをしていただいたり、畳のスペースを設置していただいたりしました。また、保護者や地域の方たちによる月二回の読み聞かせや親子読書も実施しました。

職員は、子どもたちに読ませたい本の充実に向け、必読図書や推薦図書・チャレンジ図書を設定したり、子ども主体の図書館まつりの工夫・一人ひとりの読書カルテの作成・子ども一人ひとりにこの子は今こんなことで悩んでいるからこんな本を読ませたいと読書相談をしたりしました。

何より力を入れたのは、国語科の授業で『並行読書』を取り入れたことです。例えば『大造じいさんとガン』を勉強する時には作者

椋鳩十に関連した作品を『並行読書コーナー』に設置し、一人ひとりが休み時間や放課後、家庭で読み進めていきます。毎時間の授業中にも今読んでいる本を紹介したり最後に自分が読んだ本の交流会をしたりして領域を広げていきました。

一人ひとりにアプローチしていったことにより、語彙に対する意識が高まり、微妙なニュアンスを感じることができるようになりました。

三年生の子ども達があんなことを言っていました。

『種を埋める？』『種を植える？』『種を蒔く？』『どれがぴったりあうかな？』『埋める』は、宝物をぎゅつと深く埋める感じ。『植える』は、パンジーの苗を植え替えるとか。『蒔く』は、豆をまくとか。一年生で習った『大きなかぶ』のおじいさんが使っていたよ。ぱらぱらって感じ。』

また、年々児童の読書量は一人あたり年間60冊・80冊・100冊と増えていきました。ただ読書冊数だけにこだわらず、だんだん本の内容面にもこだわることが増えていきました。

『しっぱいのれんしゅう』という本を借りていた下さんが、友達が失敗して落ち込んでいた時に、「本にも書いてあったよ。失敗は恥ずかしいことじゃないよ。失敗を繰り返すことは努力していることだよ。失敗しても、それが練習だから気にしない気にしない」と言って、励ましていました。

子どもたちも教師も語彙に対する意識が

少しずつ変わっていった時の喜びを、みんなで共有したことを今でも覚えていています。ただ本を読む、冊数比べをするだけではなく、語彙に興味を持ち、言葉を楽しみ子どもたちになって欲しいと願っています。そのために、私たち大人がどのようなアプローチをするのかが問われてきます。

大野先生は、美濃加茂市地区連合PTA事務局をしておられます。市連Pでは子どもたちが読書に親しむ活動を推進されています。

市連合PTAから「みのぼん」誕生



PTAのキャラクター「みのぼん」が誕生しました。本を読むことで、心の芽がぐんぐん伸びて、豊かな心が育つようにと願いを込めて、頭には若葉をイメージしたりポンをつけました。子ども達の周りにいつも「みのぼん」がいるように、本を読む習慣をつけて、いつまでもかわいがってください。

#### 家庭で読書……いっしょにいっしょに！

定住自立図書館講演会  
「さあ家読(うちどく)をはじめましょう」  
講師 中島 進さん

(家読推進プロジェクト事務局長)

二〇一四年一月十八日 午後二時～四時

美濃加茂市東図書館 二階 視聴覚ホール

へぜひ、ご参加ください

入場無料

# 読書タイム

市内の学校・園・施設の  
子どもと読書をのぞいてみました

古井小学校では、読書活動をPTAと連携しながら推進しています。

◎家庭での読書を啓発する『回覧図書』活動

本校では、家庭間での本の回覧をしています。

その際、保護者は本の感想を一冊のノートに記し、本と一緒に回覧することになっていきます。そのノートは、学校に戻ってくる頃には、読み古されてほろぼろになっています。

活字離れが問題になっている今日、保護者の意識を変える上でも大変意義のある活動になっています。

◎本の魅力を伝える『読み聞かせ』活動

本校の『読み聞かせ』の歴史は、平成七年、夏休みにセンダンの木の下でPTAのお母さん達が読み聞かせを行ったことに始まります。その後、月1回の保護者や地域の方による読み聞かせが行われました。『読み聞かせ』の時の子ども達は、目をきらきら輝かせ聴き入っています。それが、読み手側の「もっと上手く読みたい」という思いを駆り立てます。

今年、その思いを子どもたちに感じさせたいと、児童による『読み聞かせ隊』を結成しました。指導者は司書の先生や



間かせを披露しました。

これからは、子ども達が読み手になっ

て『読み聞かせ』の魅力を地域に発信していきます。一月には、保育園と老人福祉施設で、二月には、東図書館、中央図書館での読み聞かせを計画しています。

## 古井小学校

古井小学校では、読書活動を通して児童に国語力を身につけさせるだけでなく、子どもと保護者、そして地域のひととの絆をも深めていきたいと思います。読書の好きな子どもとを確信し、今後も読書活動に力を入れていきます。

### 図書館クイズの答え:

③「ぐりとぐら」です。1963年に登場して半世紀。なんと市立図書館の最近の3カ月での児童書での貸出冊数でもNo.1! 「いないいないばあ」(1967年)「はらぺこあおむし」(1976年)も長く読みつがれる大切な宝物です。



「わすれられないおくりもの」

スーザン・パーレイ作  
評論社 1260円

かけがえのない人を失うことは本当に悲しいことです。けれども必ず「おくりもの」を残していつかくれるのです。ずっとあなたのそばに……

「先生、保護者のための『賢い管理者』とネット教育のすすめ」

なるために」



今津孝次郎監修・著  
学時出版 1365円

新しいツールの登場で、子ども時代の人間関係構築について考えなければいけない時代になりました。以前からも核家族化、

地域との関係希薄化が問題になっていますが、このコミュニケーションツールは、使い方を間違えると、気付かないうちに心と身体に大きな影響を与えたり、被害者にも加害者にもなりえます。お子さんと一緒にスマホの使い方を考えてみませんか。『中高生のためのケータイ・スマホハンドブック』(同校編著)もお勧めします。こちらは有志生徒たちが自分たちの目線で改訂を繰り返し作られたものです。



「ジエインのもうふ」

アーサー・ミラー作  
偕成社 1260円



ジエインのもうふ

赤ちゃんのジエインは、ピンクで、ふんわりして、あつたかーいもうふが大好きです。ねる時もあそぶ時もいつも一緒にいた。そんなジエインも女の子に成長し、もうふは小さくなりすり切れて穴があいてしまいました。もうふとは、お別れなのでしょう。素敵な結末に、「こころがあたたくくなりますよ。」

## この本読んでみて!



「ロスジェネの逆襲」  
池井戸潤作  
ダイヤモンド社 1575円

飛ばされたバブル世代の主人公・半沢直樹は、証券会社に向向しています。親会社から受けた圧力や嫌がらせを知恵と勇気で倍返し。「やられたら倍返し」のフレーズはTVドラマで話題となりました。地元出身の直木賞受賞作家、池井戸潤による、企業を舞台にした痛快エンターテインメント小説! 読み始めたら、おもしろくて止まりません。第一・二部も読んでみてください!

